

詳 報 第3回建設



ランナーフォーラム

②

建設業の新分野進出や技術開発に先見性は欠かせないテーマだ。新たな発想で、地域産業をリードする企業も出てきた。そこに共通するのは、事業に力ける熱い思いと変化に立ち向かう姿勢だ。この姿こそが未来の力につながっていく。

■独自の仕組みづくり

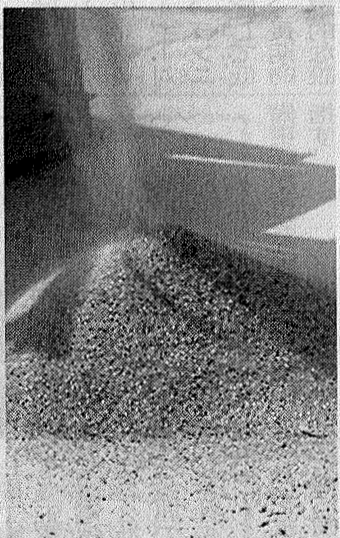
札幌から東へ約3000キロ。かつて世界一のハツカの生産地だった地元が、舟山組(北海道北見市)の手掛けるオーガニックハーブの発信地だ。「インフラが成熟する

●全体フォーラム事例発表Ⅱ

と、公共事業は間違いなく農業・化学肥料を使わず栽培する。異業種にも目を向けておかない」と。舟山組などのオリジナル商品に秀太郎社長は、差し迫る厳しい現実を予感し、造園部の苗圃(びょうぼ)を生かしたハーブ栽培に着手。1997年に農業生産法人として設立し、新事業として独立させた。

4年前から産業用大麻の栽培にも踏み切った同社。コンセプトは、有機栽培を意味する「オーガニック」(2003年JAS認定取得)。約50種類のハーブを、

環境保全に本気で取り組みたい」と思った。迫田修社長は、開発に至った経緯をこう振り返る。



加工後の「アリスサンド」(アリスコンサルタンツ)

アリスコンサルタンツ(鹿児島県鹿児島市)は、10年前から環境分野に主眼を置いた代替骨材の研究・開発に取り組んできた。その一つとして注目を集めていたのが、廃ガラスを再資源化した代替骨材「アリスサンド」だ。

「安全な物性でありながら、建設リサイクル法の品目に入っていないのが残念」と訴える迫田社長。このシステムで、危険物が扱われなくなったガラスが、資源として活用される日は遠くはない。

優れた環境を次世代に継承する。松江土建(島根県松江市)が研究・開発した「WEP」(水環境保全システム)は、ダムや湖沼の貧酸素による水質悪化を解消する画期的なシステムだ。

先見性で地域産業をリード

日本には建設業が必要です

※毎週水・金曜日に掲載